枝打ちと共に学んだ冒険

名人　山本　信綱（76）　岐阜県不破郡関ヶ原町
聞き手　國分　亮　福岡県立久留米筑水高等学校2年
平成16年取材

「森の名手・名人」とは、森に関わる仕事や地域生活に染み込んだ営みのうち、優れた技をもってその業を極め、他の模範となっている達人で、毎年、全国で約100名が選定されています。岐阜県において は、現在、23名の「森の名手・名人」がいます。
この「森の名手・名人」を「森の"聞き書き甲子園"」に参加した高校生が「聞き書き取材」をしたものの中から誌面の関係上要点を抜粋したものです。なお、年齢、住所、学年は取材当時のものです。

▼山本信綱さん

1. 枝打ち職人になるために

木から落ちて怪我をしないように、毎日10回くらいの木登りの練習から始めたそうです。それがある程度できるようになると、次にナタを持って枝を切る練習をされたそうです。父の教育のもと、一生懸命に頑張ったそうです。

枝打ちというのは、大きさや木の種類によって、難しさが全然違う。初めはなかなか思うようにいかないそうです。そのため、基準を決めてマスターしていくことが大切で、樹齢が30年生であれば、25本くらい、5尺も6尺もある大木であれば、一日に4～5本くらいの量をこなすことで慣れていくそうです。

父親は木に登るのがとてもうまく、蛙のようにピョンピョンと登っていたようで、「そりゃあうまかった。」と話されていました。大きい木もロープ一本で登っていってしまうそうで、山本さんも「うまいこと登っていくなぁ。」と感心されていたそうです。

若い頃の山本さん

父親のすごさはそれだけではなく、講師をされるときも、その話し方が「そりゃまたうまかった」と言われていました。そのため、話術も勉強しなければいけないと感じたそうです。枝打ちという仕事は、ただ枝を打つだけでなく、人間関係を養う場でもあるのだそうです。今の名人といわれる山本さんがあるのは、偉大な父親の存在があったのだと思いました。

2. ナタについて

ナタは一丁ではだめで、いつ欠けたり、曲がったりするかわからないので、必ず二丁持って行かなければならないそうです。そのため、ナタを研ぐ作業も2丁とも、しっかりと行うそうです。また、ナタは一日に4回研ぐそうです。仕事始めに行い、10時半の休憩時、12時の昼食時、そして、3時の休憩時です。

ナタは切れなければ何の意味も持たないと言われていました。ナタの切れ味は、細い枝では分からなくとも、太い枝を打った時に、大工さんがカンナで削ったかのように切り口がピカーっと光って見えないとだめなんだそうです。

ナタには、裏と表があり、右でナタを持つ人は表に7分、裏に3分の傾きをつけるのだそうです。その理由は、ダーンと打ちこむときに、7分のゆるやかな斜面の表歯で枝を切り、3分の急な斜面の裏歯では枝を弾いてくれるといった原理だそうです。これによりナタが木に食い込むことを防いでくれ、作業を楽にしてくれると言われました。

ナタの使い方は、枝を下からばかり打っていてもだめで、斜めからくちばしのようにうち、シザを少し残し、上刃で樹幹いっぱいに斜めはしに切り取ります。

そして幹の両面を、綺麗に削っていきます。するとだんだん30～40年くらいたつと枝座がピシャーっとくっつきますと言われました。

3. 「人の手」代表の山本名人

今は、下からリモコンでポンポンと枝を打つ機械があるらしく、山本さんが住んでいた吉野には、ドイツ製の機械があったそうです。そこで、吉野の組合長が「山本さん、あの枝打つ機械と山本さん競争してくれないか？」と言われて、「そんなもの機械が勝つに決まってるじゃないか」と言ったそうです。「組合長さんその機械はいくらするんだい？」と聞くと、２００万すると言っていたそうです。勝負はしたものの、「そりゃあもう機械は断然早かった。」と笑いながら話して下さいました。

しかし、機械と人間の枝打ちの違いは枝座の埋まる速さだそうです。機械と競った後、5年くらいたって見に行く機会があったそうですが、ロボットで打った座は直らず、そのままで全く埋まっていなかったそうです。「私が打った座は8分くらい埋まってしまってたんだよ。」と得意げに話されていました。

どうして、この木の切り口が埋まるかというと、樹木は表皮とその中の形成層からできています。その形成層が下から養分をあげると、この形成層の力によって、この傷がだんだん直っていくというわけです。今のロボットで打ったやつは、枝が下からプツンプツンと打ってるものだから、形成層が完全にとれてないわけなんだ。形成層が見えないがために、この木が大きくなっても傷口はちっとも埋まらない。「ちょうど人間のへそみたいに穴が開く」と詳しく話して下さいました。穴が開いたところに梅雨時になると、雨が入るそうです。だから、「昔から枝はナタで打たなきゃいけないと言われてきたんだよ。」と、強調されていました。

今の機械は進歩しているのですが、機械では30年生くらいまでの樹木が限界なんだそうです。だから、どんな特殊な樹木でもやっていけるという点でも、人の手の方が臨機応変なのです。

杉の大木を登っている状況

4. 枝打ちの知識

まず、知識として覚えておかなくてはならないことは、どこから枝を打っていかなければならないのかという疑問が多いです。木に登っていくと、樹木の樹幹と呼ばれるところの一番高い頂点のところから正三角形となるところに、力枝という太い枝が2～3本あります。この力枝を残して、そこから下を打っていくことが枝打ちをはじめるポイントだそうです。

枝打ちの目的は幹の大きさを均一に本末同材を得ることと節の無い「無節材」を作ることです。幹の太さはすべての方向から陽が当たること、無節材には枝を打つことが大切です。お日様が東西南北どこからでも照らす、この層のことを「陽樹層」といい、その下の木と木の枝が交差して日光が当たらないところの部分を、「閉鎖層」（ウッペイまたは交差層）といいます。

それから下の枯れ枝などがたくさんひっついてきて、日光が全く当たらない「陰樹層」があります。木というのは、この三層に分かれているわけです。そしてその交差層から下の小径木に日光を当てるという目的が肝心なわけです。

そのため、この「本末同材」「無節」「小径木にお日様を照らしてあげる」という三つの項目を頭の中に常においておきながら仕事をして行かなきゃいけないんです。

5. 枝打ちの仕事は一人ではありません

高い木に登って怖くはないのかと聞くと、「そういう怖いなどということを考えていてはいけないのです。木の上で考えることと言えば、落ちないことです。私は木から2回ほど落ちたことがあります。そんなときは何かを考えてしまっているんですね。だから妻とケンカして家を出る時には、山に入ってもおもしろくはありません。そのため、私の母親が僕の妻にこういいました。『息子を山に行かせるときには、どんなに腹が立っていても笑顔で見送ってやってくれないかい』と。」そこで、山本さんの奥様は、仕事に出るときはいつでも、笑顔で行ってらっしゃいと見送ってくれていたそうです。

「枝打ちという仕事をすること自体は確かに一人でやらなければなりません。しかし、こういった、家族や周りの人とのコミュニケーションや支えが大切なんです。」と話されていました。

テレビ放映された枝打ちの状況

6. どんな仕事よりも枝打ちが生き甲斐

枝打ちの仕事は70歳台までやったらしく、それまで仕事が切れたということはないのだそうです。「どんなに不景気になっても、今でも仕事は入ってきてます。」と笑っておられました。それもあり、「その時は枝打ちが楽しくて生き甲斐でしたから。コンピューターなどの会社に行こうとは全然考えたことはなかったんですよ。」と、生き甲斐ということを教えてくださいました。

「今後、枝打ちを望む後継者が現れたのなら、大歓迎です。」と即答で答えていただきました。山本さんも色々と講師をされたらしく、そばで教えていらっしゃった時に、「教え子が成長していってくれるのを見るとやっぱりうれしいです。枝打ちをもっともっと普及したいなぁもっともっと！」と、元気よく僕たちに伝えてくれました。

名人　山本信綱（やまもとのぶつな）さんのプロフィール

- ●生年月日：昭和3年4月12日生まれ
- ●出身地：岐阜県
- ●仕事内容：昭和20年頃から家業の林業に従事し、昭和46年からは森林組合の作業班として森林作業に長く従事した経験から、地元の伝統的技術であるブリ縄を使って木に登る枝打ちの技術を習得し、はしごを使わずに縄だけで木に登り、枝打ちを行うことができる。主に地元である岐阜県関ヶ原町において活動を行ってきたが、全国各地から依頼を受け枝打ち技術を教えに行っている。
- ●受賞歴：平成4年　中日造林賞林野長官感謝状
  平成5年　岐阜県林材振興大会岐阜県知事表彰
  等多数受賞

※原本は長文のため、文章の一部を割愛しています。

【森の名手・名人編集担当
㈳岐阜県緑化推進委員会　佐藤正吉】